

S C H E D U L E						
	歴史展示室	常設展示室 1	常設展示室 2	常設展示室 3	常設展示室 4・5	特別展示室
4月	かがわ今昔 香川の歴史と文化	お雛様と 道具たち 4/13	生誕120年 イサム・ノグチV 4/13	弘法大師空海の 生涯と事績	小林萬吾 4/13	
5月		4/22	4/15		4/22	
		御座船 「飛龍丸」	ニッポンの 城		高松城 一海にのぞむ城の ものがたりー	
6月		6/1	6/1		6/1	
	6/6 掌の美 7/13	6/3 昭和の記憶と 美術 7/23	6/6 昭和の 香川 7/23			

特別展「高松城―海にのぞむ城のものがたり―」関連イベント

講演会 無料・要事前申込

高松築城ものがたり
高松城の築城について城主となった生駒家や松平家の役割などをふまえてお話しします。
日時：4月26日(土)13:30～15:00
講師：胡光氏(愛媛大学法文学部教授)
会場：地下1階講堂
定員：230名(先着順)
申込期間：3月26日(水)～、定員になり次第終了
海城町(うみじろまち)・高松のものがたり
高松を「海城町」としてとらえ、都市としての成り立ちや景観の特徴についてお話しします。
日時：5月11日(日)13:30～15:00
講師：西成典久氏(香川大学経済学部教授)
会場：地下1階講堂
定員：230名(先着順)
申込期間：3月26日(水)～、定員になり次第終了

■講演会の申込方法
電話、「香川県電子申請・届出システム」(*)から。
※「香川県電子申請・届出システム」を利用する場合
香川県立ミュージアムWEBサイト右下の「関連リンク」から「香川県電子申請・届出システムのページへ」をクリックしてください。

ナイトミュージアム

特別展「高松城」会期中の以下の6日間は開館時間を午後8時まで延長します(入館は午後7時30分まで)
日程：4月26日(土)、5月3日(土・祝)、5日(月・祝)、10日(土)、17日(土)、24日(土)
サタデーナイトトーク 要観覧券・申込不要
落ち着いた観覧できる夜間開館。展覧会会場にて担当学芸員がじっくりと特別展の見どころを解説します。
日時：5月5日(月・祝)を除く各日／各回18:30～(30分程度)
会場：2階特別展入口集合
ナイトコンサート「サヌカイトの響き」 無料・当日受付
香川ゆかりの石「サヌカイト」が奏でる澄んだ音色とともに優雅な夕べのひと時をお楽しみください。
日時：5月5日(月・祝)18:30～19:20(開場18:00～)
会場：1階図書コーナー
奏者：臼杵美智代氏(サヌカイト)、長田順子氏(ピアノ)
定員：先着50名、(多数の場合は立ち見可能)
イサム・ノグチ「AKARI」ライトアップ 無料
岐阜提灯との出会いを機に生み出した、光の彫刻「AKARI」を夜間開館時間中、特別点灯します。ノグチの代表作「アーケイック」の周辺で灯る「AKARI」をご堪能ください。
会場：1階図書コーナー
点灯時間：夜間開館日の17:30～20:00

香川県立ミュージアム

〒760-0030 高松市玉藻町5番5号
TEL.087-822-0002(代表) FAX.087-822-0043
https://www.pref.kagawa.lg.jp/kmuseum/kmuseum/index.html
日時・内容については変更になる場合があります。最新情報は当館WEBサイトをご覧ください。



分館 瀬戸内海歴史民俗資料館

〒761-8001 高松市亀水町1412-2
TEL.087-881-4707 FAX.087-881-4784
https://www.pref.kagawa.lg.jp/kmuseum/setorekishi/index.html



分館 香川県文化会館

〒760-0017 高松市番町1丁目10番39号
TEL.087-831-1806 FAX.087-831-1807
https://www.pref.kagawa.lg.jp/kmuseum/kmuseum/bunkakaikan/kfvn.html



瀬戸内海歴史民俗資料館のイベント 無料・要事前申込

1. 重要文化財指定記念事業 連続セミナー「五色台から考える」
歴民が建つ五色台とはどんな場所なのか。視点を変えながら五色台を紹介する全4回のセミナー。会場となる各施設の見学もあわせてお楽しみください。
日時：① 5月10日(土)「五色台の開発」
松岡明子(瀬戸内海歴史民俗資料館館長)
② 5月24日(土)「四国遍路と五色台」
上野進氏(徳島文理大学教授)
③ 6月7日(土)「五色台周辺の民俗」
田井静明(瀬戸内海歴史民俗資料館専門職員)
④ 7月5日(土)「養蜂から五色台を考える」
田中祐氏(中田養蜂代表取締役社長)
時間：各回10:00～11:30
会場：①五色台少年自然センター ②白峯寺
③瀬戸内海歴史民俗資料館 ④五色台ビジターセンター
定員：①②④各40名・③30名(先着順)
申込期間：①4月1日(火)～、②4月15日(火)～、
③4月29日(火・祝)～、④5月27日(火)～、定員になり次第終了

■申込方法
電話、「香川県電子申請・届出システム」(*)から。
申込の際に、氏名、電話番号、イベント名をお伝えください。
申込先:瀬戸内海歴史民俗資料館 TEL.087-881-4707

2. 重要文化財指定記念講演会
日時：6月21日(土)13:30～16:00
講師：松隈洋氏(神奈川大学教授)※基調講演のほか報告等も予定
会場：香川県立ミュージアム地下1階講堂
定員：230名(先着順)
詳細・申込方法等については今後お知らせする予定です。瀬戸内海歴史民俗資料館WEBサイトをご覧ください。

『高松松平家歴史資料目録Ⅶ 小品盆栽道具』を刊行します

高松松平家12代当主頼寿愛用の小品盆栽道具500件
あまりを写真付きで掲載。
頁数：A4判 80頁(カラー32頁・モノクロ48頁)
価格：1,400円
取り扱い：ミュージアムショップ
発売時期：4月～



県展の開催時期が秋になります！
第89回香川県美術展覧会は会期を変更して開催します。それにともない、作品募集期間も変更となりますのでご注意ください。
開催要項配布期間：7月下旬～
※「香川県電子申請・届出システム」で出品申込書が作成可能です
会期：第1期(絵画・立体)11月15日(土)～11月24日(月・休)
第2期(工芸・写真)11月28日(金)～12月7日(日)
第3期(書) 12月11日(木)～12月20日(土)
※詳細は当館WEBサイトにてお知らせします

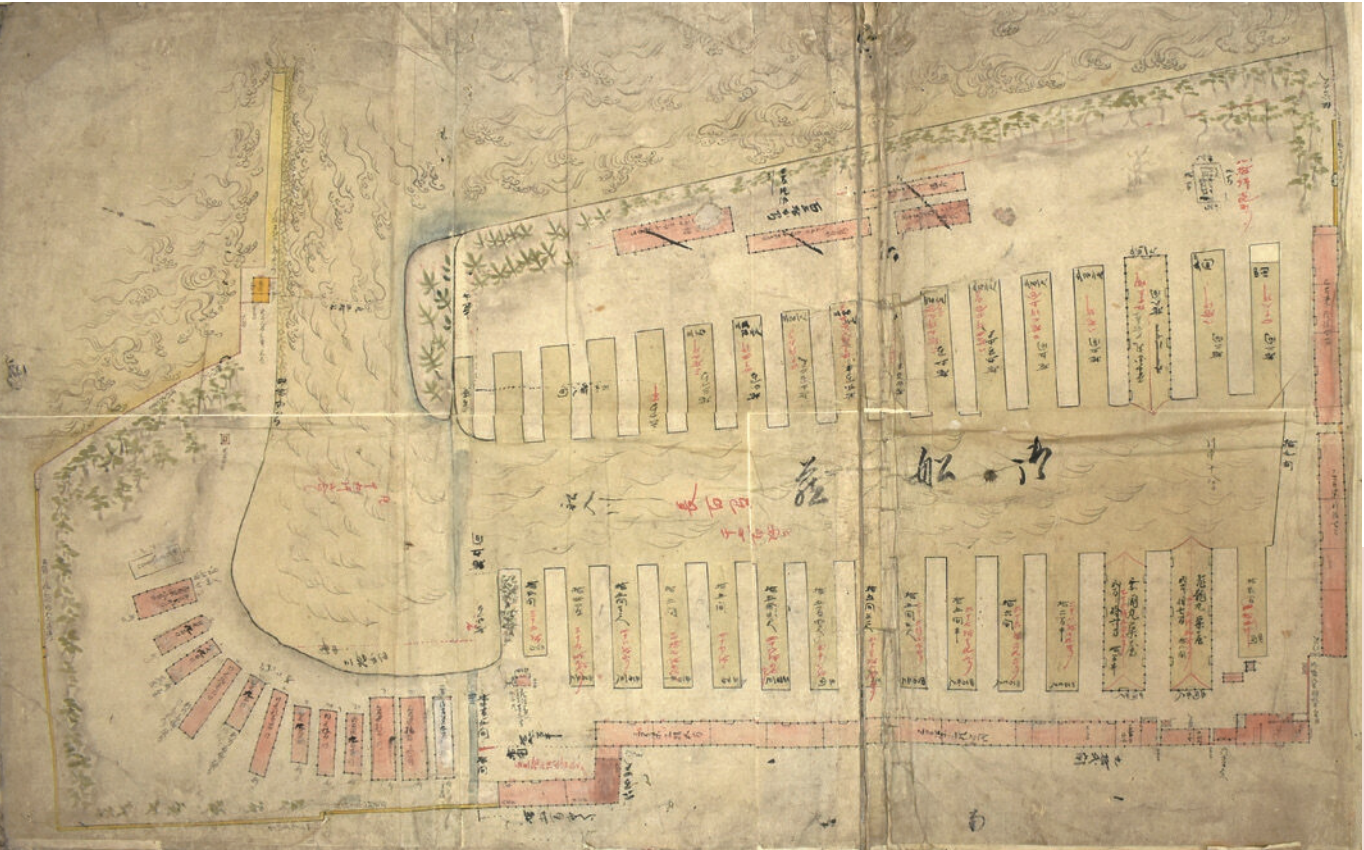
カフェポット ミュゼ
くつろぎのひとときに、カフェポット ミュゼをご利用ください。「高松城」展限定メニューもご用意しております。
営業時間：9:00～17:00(オーダーストップ16:30)
夜間開館の日は9:00～20:00(オーダーストップ19:30)
ミュージアムショップ
1階ミュージアムショップでは、当館オリジナルグッズも販売しております。
営業時間：9:00～17:00
夜間開館の日は9:00～20:00



NEWS

THE KAGAWA MUSEUM

香川県立ミュージアム ニュース
2025 春号
vol.64



CONTENTS

特別展 高松城一海にのぞむ城のものがたりー
御座船「飛龍丸」と高松城

展示室だより 特別展 小沢剛の讃岐七不思議
常設展 掌の美
常設展 昭和100年記念 昭和の記憶と美術
常設展 昭和100年記念 昭和の香川

ミュージアムガイダンス もっとミュージアムを楽しんでいただくためにー
新しい甲冑が登場！

トピック 瀬戸内海歴史民俗資料館が重要文化財に指定されました
れきみんだより 高松和傘の多彩な図案

高松藩御船蔵図

江戸時代 愛媛県歴史文化博物館蔵
高松藩の船を泊めておくための場所である「船蔵」を表した図。高松城の西、現在のJR高松駅付近にあった。クシの歯のようにになっている部分が船を入れる場所で、三十二艘分ある。画面の右側、船蔵の奥側に、藩主の乗る御座船「飛龍丸」を収める場所が示されている。

特別展「高松城 ―海にのぞむ城のものがたり―」

御座船「飛龍丸」と高松城

瀬戸内海をのぞむ城・高松城に象徴されるように高松藩と海には深い関わりがあります。船もまた海と高松藩をつなぐ重要なアイテムです。ここでは高松藩主専用の船を描いた絵図を中心に、船と高松城の関係を紹介します。

御座船「飛龍丸」を描いた絵図

帆に風をうけて1艘の船が海上を進んでいます(図1)。描かれている船は高松藩の御座船「飛龍丸」で、大きさは船長約29メートル、幅8.2メートルであることが書込みから分かります。ちなみに、高松と女木・男木島をつなぐフェリー「めおん」が全長32.5メートル、幅10.5メートルです。

「飛龍丸」が高松藩初代藩主・松平頼重の命で造られたのが寛文9年(1669)、その後「飛龍丸」は4回ほど造り替えられています。造り替えの際に記録のために作成されたのが、香川県指定有形民俗文化財の「高松藩飛龍丸船明細絵図」です。海上を進む「飛龍丸」の図はその内の1枚になります。

絵図は全部で8枚あり、宝暦4年(1754)の造り替えの時に描かれた絵図3枚、寛政4年(1792)の造り替えの絵図5枚から成っています。図1は宝暦の絵図の1枚で、他に船の屋形の内部の装飾を1階と2階に分けて描いた絵図(図2)などがあります。寛政の絵図には、船の側面図や平面図(図3)、船尾の立面図と造船に使った板に関する図があります。色鮮やかに仕上げられ、家紋は胡粉で盛り上げた上に金箔を貼って表現するなど手の込んだ図になっています。

「飛龍丸」の外観がよく分かる図1では、松平家の家紋が染め抜かれた赤い幕や紅白の幕、金文字で「飛龍丸」と記された額などが目立ちますが、鎗や弓、鉄炮といった武器も並んでいます。豪華さと武力の両面をもったのが御座船だったのです。

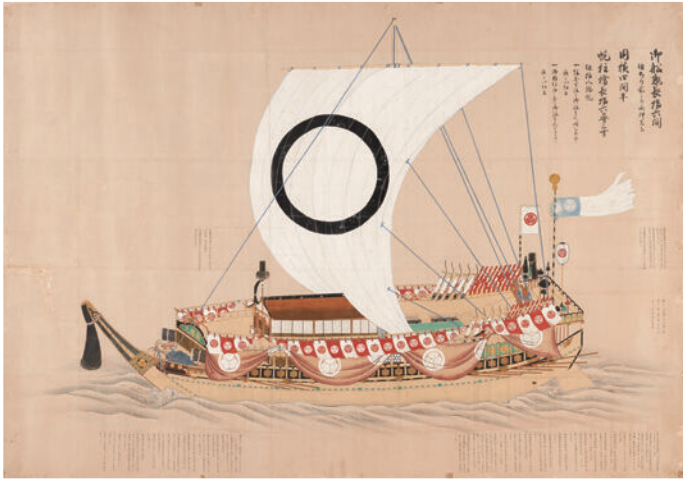


図1 高松藩飛龍丸船明細絵図 惣図
(香川県指定有形民俗文化財、公益財団法人松平公益会蔵)

宝暦の「飛龍丸」の内装を表したのが図2です。御座船には藩主の居場所となる屋形が設けられ、金をふんだんに使った襖絵や障壁画が描かれていました。

図3は寛政の絵図で、「飛龍丸」の平面図。図の上側、茶色に塗られた場所は蒸し風呂(サウナ)、下側には厠(トイレ)があったことが示されています。料理をする場所もあったようです。

御座船は外側も内側も華やかに飾られ、藩主が快適に過ごせるような設備が整えられていたのです。



図2 同 鱧真向之図・御屋形之図 部分

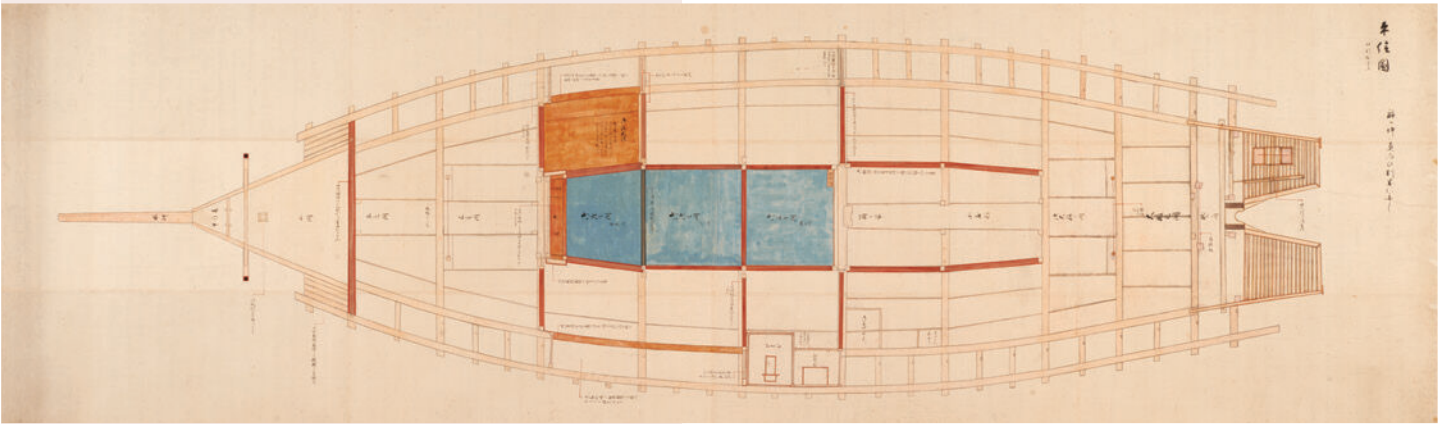


図3 同 平絵図

戦いの船からの変わり身

絵図から分かる「飛龍丸」は、ぜいたくな客船というイメージですが、御座船のベースとなったのは関船という軍船の一種です。関船は戦国時代には安宅船と呼ばれる大型軍船の周囲を固める役割を果たす中規模の軍船でした。江戸時代になると安宅船のような大型軍船の建造が禁止され、関船が藩主の船の主流となりました。

とはいえ、江戸時代は合戦が行われなくなる時代。関船が軍船として活躍する機会は少なくなります。戦いのための関船が、豪華に飾り付けられ、過ごしやすいように変化したのが御座船なのです。

では、御座船はどこで活躍したのでしょうか。

藩主は、自分の治める国元と将軍のいる江戸を1年おきに往復しました。四国や九州を治める藩主は、海を渡らなければならず、御座船を利用しました。華やかな外見ながら本来は軍船である御座船が、大小の船を率いて海上を進むがたは周囲の目をひき、城と同じように大名の力を示す役割を果たしたのです。

「飛龍丸」と高松城

御座船「飛龍丸」はどこに泊まっていたのでしょうか。

「飛龍丸」などの高松藩の船は、現在の高松市大場付近にあった専用の港に繋がれていました。もともと高松城の西側の外堀が藩専用の港(舟入)でした。高松藩の持つ船の数が増え、明暦2年(1656)から寛文10年(1670)の間に新たに港が造られました(図4)。寛文9年には御座船「飛龍丸」が登場、そして高松城の拡張が行われました。城には新しい天守が完成し、海を見張る「月見櫓」(重要文化財)と海から直接城に出入りする「水手御門」(同)などを備える北の丸や、現在当館が建つ東の丸などが造られました。

初代藩主松平頼重は高松藩を与えられる時に、将軍から直々に「西国・四国の目付(監視役)」となるよう告げられています。重要な航路である瀬戸内海を抑え、将軍家が警戒する四国や九州の有力な大名たちを監視する役割が求められていたのです。

藩専用の港の拡張、新造船の建造、城の拡大と充実は、こうした役割を果たすためにとられた一連の政策として捉えることができます。

この春の特別展「高松城―海をのぞむ城のものがたり―」では高松城と海や船、港との関わりを紹介し、連携企画として、今回紹介した「高松藩飛龍丸船明細絵図」の全図を常設展「御座船『飛龍丸』」で展示します。あわせてご覧ください。

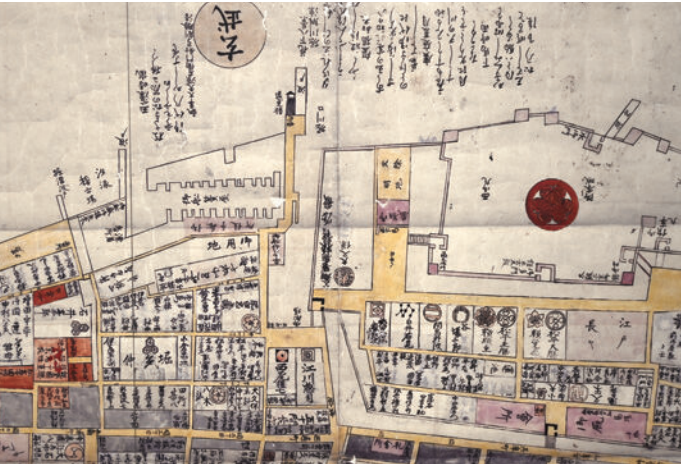


図4 高松城下屋敷割図 部分(当館蔵)

展覧会情報

特別展 | 高松城
―海にのぞむ城のものがたり―

会 期：4月22日(火)～6月1日(日)

会 場：香川県立ミュージアム

開館時間：9:00～17:00(入館は閉館の30分前まで)

※夜間開館 午後8時まで 4/26、5/3、5、10、17、24

休 館 日：月曜日(5月5日(月・祝)は開館)、5月7日(水)

観 覧 料：1,200円、前売・団体[20名以上] 1,000円

※玉藻公園と相互割引(団体料金)があります

※瀬戸内国際芸術祭パスポート提示で団体料金(4/22～5/25)

※高校生以下、県内在住の65歳以上、障害者手帳、特定医療費(指定難病)受給者証等をお持ちの方は無料

連携企画 | 常設展 御座船「飛龍丸」

会 期：4月22日(火)～6月1日(日)

会 場：常設展示室1

連携企画 | 常設展 アート・コレクション
ニッポンの城

紙版画家 井上眞男(1932～2022)の作品「日本の城シリーズ」から四国をはじめ、全国各地の城を選りすぐり、紹介します。

会 期：4月15日(火)～6月1日(日)

会 場：常設展示室2

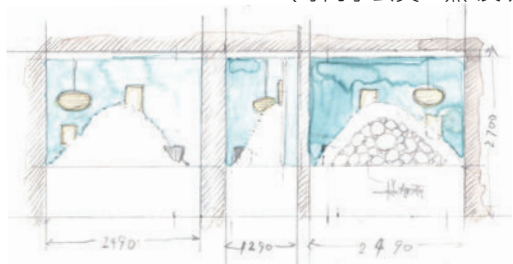
特別展

小沢剛の讃岐七不思議

8/9(土)～10/13(月・祝)

歴史や社会にユーモアと批評精神を交えて様々な問いを投げかける美術家の小沢剛(1965～)の特別展です。現在、小沢は当館の膨大な資料や情報から、独自の視点でモノ・コトに着目し、触発された作品を制作中です。それらの作品と、着想を得た当館の資料を組み合わせるという、これまでにない新しい試みの展覧会となりますので、ご期待ください。

(専門学芸員 黛 友明)



小沢剛による展示構想ドローイング

常設展示室2 アート・コレクション

昭和100年記念 昭和の記憶と美術

6/3(火)～7/23(水)



前田常作「絵日記 9月のマンダラ」
昭和44年(1969)

戦後、日本は世界に開かれ、社会が大きく変容しました。美術も社会の潮流から大きな刺激を受け、新しい表現が誕生します。戦後昭和の日本や香川の美術を紹介し、当時の記憶を呼び覚まします。

(主任専門学芸員 窪美 西嘉子)

ミュージアム・トーク: 6/15(日)、7/13(日)
各回14:00～(30分程度)

学芸講座 昭和100年・戦後80年を振り返る

2025年が昭和100年と戦後80年の節目になることから、歴史・美術・民俗それぞれの視点から時代を振り返る学芸講座を2回開催します。詳細は当館WEBサイトに掲載します。

常設展示室1

掌の美 —茶道具を中心に—

6/6(金)～7/13(日)

掌に載るほどの大きさの、美しき茶道具を紹介します。江戸時代、高松松平家の御用塗師・玉楮象谷の「堆黒松ケ浦香合」をはじめ、香川の漆芸家音丸耕堂による「堆漆茶杓」、現役陶芸家として活躍する鈴木藏の「志野茶碗」などを展示します。

(主任学芸員 日置 瑤子)



鈴木藏「志野茶碗」昭和57年(1982)

ミュージアム・トーク: 6/14(土)、7/6(日)
各回14:00～(30分程度)

常設展示室4・5

昭和100年記念 昭和の香川

—人びとの暮らしとまちの変化— 6/6(金)～7/23(水)

2025年は「昭和100年」の節目の年に当たります。64年にわたって続いた昭和は、政治や文化、技術などあらゆる面で、人々が大きな変化を経験した時代であり、香川の人びとの暮らしやそれを取り巻くまちも大きく変化しました。収蔵資料を中心に、香川における「昭和時代」を振り返ります。

(学芸員 芝野 有純)



「子供用戦争柄着物」
昭和時代初期

ミュージアム・トーク: 6/22(日)、7/19(土)
各回14:00～(30分程度)

日 時: ①6/28(土)、②7/5(土)各回13:30～15:00
会 場: 地下1階研修室
申込期間: 5/28(水)～、定員になり次第終了
定 員: 72名(先着順)

もっとミュージアムを楽しんでいただくために— 新しい甲冑が登場

着付け体験がパワーアップ!

玉藻公園(史跡高松城跡)内での散策ができる新たな甲冑着付け体験(屋外型)が登場しました。

さわって、体験して、学ぶ。

当館には、展示室だけでなく体験学習室があります。体験学習室は、甲冑や十二単(複製品)の着付け体験ができ、また近頃ではあまり見かけなくなったベーゴマやお手玉などの昭和のおもちゃや、盤双六や投扇興など歴史上の遊具(複製品)などを手に取って遊ぶなど、体験して歴史を学ぶハンズオンの一室です。香川県歴史博物館(現香川県立ミュージアム)が開館した平成11年(1999)より、校外学習で訪れる児童生徒さんなど、多くの方々に楽しんでいただいています。



屋内型着付け体験の甲冑と十二単

当館の着付け体験の甲冑や十二単は、実物よりややコンパクト。源平合戦図にも登場する大鎧を模して制作された甲冑は、それでも胴や脛当、籠手、最後に兜を着けると全部で約17kgもあり、身に着ける武将や戦の様子への想像が駆り立てられます。平安時代の宮中の女性の装束である十二単は、当館では正月、春、秋と、季節ごとの3種類の装いがあり、6枚の衣を重ね着すると約10kgになります。

いざ! 屋外の甲冑着付け体験

こうした本格的な着付け体験ができる一方で、もっと気軽に屋外へ、しかも当館のおとなりは史跡高松城跡玉藻公園、甲冑を着て歩けたらよいのでは、という発案から甲冑で公園内を散策するプログラムを新たに創ることになりました。

散策するなら軽くと、プラスチック製であっても構造が本格的



屋外型着付け体験の甲冑
大人用の兜の前立ては、高松藩の印として用いられた釘貫き文

な甲冑を県内外の工房や企業に製作してもらうことになりました。玉藻公園と連携を図り、運営の準備を整えました。当館で着付けをして、公園内を歩けば、気分は武士、楽しみながら歴史を学べること間違いなし! 季節の植物も愛でながら、実物の石垣や重要文化財の櫓のスケールを実感し、改めて高松城の歴史を体感していただくことができます。着付け体験の後はさらに当館の展示から理解を深め、香川やこの地域ならではの文化を知っていただく機会になればうれしいです。小さいながらもこれまでなかった新鮮なプログラムから、地元の方々や観光で香川を訪れる方々の好奇心や楽しみが増すことを願っています。

(主任専門学芸員 窪美 西嘉子)

春の特別展「高松城」を鑑賞した後は、武士の気分でお城を散策してみませんか。

詳しい情報はこちら



Topic トピック

瀬戸内海歴史民俗資料館が 重要文化財に指定されました

昭和48年(1973)11月に開館した瀬戸内海歴史民俗資料館(以下、当館)は、令和6年12月、国の重要文化財に指定されました。1970年代に建てられた建造物としては初の指定で、中庭を巡るように配置された諸室からなる建物一棟のほか、^{づかり}附として石積擁壁や建築・構造図面108枚が指定文化財となりました。

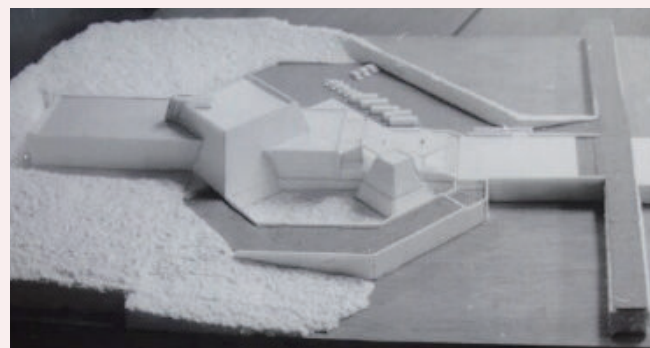
五色台の自然の中で

当館を設計した山本忠司^{ただし}(1923～1998)は、香川県建築課職員として建築家丹下健三(1913～2005)が設計した香川県庁舎(1958年、重要文化財)の建設に携わったほか、讃岐民芸館(1965～70年)や香川県立武道館(1966年)など多くの公共建築を手がけました。

その代表作とされるのが当館で、五色台^{こしきだい}の高低差のある自然地形にあわせて正方形の展示室等を一巡するように配置し、所々に大きな開口を設けて内外が連続するような開放的な展示空間を生み出しています。また、地中から切り出された石を外壁に積み上げて自然景観との調和を図るなど、場所性を活かした建築は日本建築学会作品賞を受賞(1975年)するなど高く評価されています。



第1展示室外壁工事の記録写真



第2案と思われる模型の写真



自然と一体化するような空間配置が当館の特徴ですが、完成までに何度かの案の変更がありました。第1案の記録は見つかりませんが、当時の県教育長から都会に相応しいモダンすぎる建物と評され再考。次いで製作された第2案と思われる図面と模型写真を見ると、長方形の広い展示室の一角に地下1階・地上2階建の正方形の建物があり、別に事務室棟を設ける計画だったことがわかります。

その後、親交のあった彫刻家イサム・ノグチとインドを旅行した山本は、ノグチの「最近の美術館は出たり入ったりしながら回ってくる」という言葉や、土地の素材と人の手で仕上げられたインドの建築に刺激を受け、帰途、現在の原型となるアイデアをまとめます。当館の建築は、五色台の自然はもちろん、建設に携わった建築家や職人、芸術家、文化庁などのほか、知事や教育長をはじめとする県関係者など多くの人が関わる中で模索され、生み出されたものでもあるのです。

媒介としての建築

今回の指定では、立地や風土を考慮し、地方の場所性を活かした建築作品であることに加え、歴史・民俗資料の収集保存、調査研究、公開展示や学習機能を備えた総合的な地方歴史民俗資料館の最初期の完存例としても評価されました。環境と人間とのかかわりを理解し、媒介としての建築を大切にしようとした山本の思いは、開館後の歴史民俗資料館としての活動を通して、当館が瀬戸内の各地域をつなぎ、瀬戸内海と人々のくらしをつなぎ考える場となることで生き続けていくのではないのでしょうか。

開館以来50年以上が経ち、施設・設備の改修や収蔵空間の確保など、さまざまな課題も見えています。五色台山上の、この場所にしかない建築をいかに維持し、活かしながら瀬戸内の文化を考える場となっていくか。収蔵する大切な民俗資料をどのように未来に引き継いでいくか。これから先も当館の歩みは続きます。

(瀬戸内海歴史民俗資料館館長 松岡 明子)

高松和傘の多彩な図案

—大学生やボランティアの協力により 気づいたこと—

瀬戸内海歴史民俗資料館(以下、当館)では、香川県伝統的工芸品にも指定されている、高松和傘の製造用具について、香川大学の学生と共同で調査しています。高松和傘の多彩な図案に関して、学生や当館ボランティアと協力しながら検討する中で気づいたことを紹介します。

大量生産を支えた和傘職人の創意工夫

高松和傘は、明治20年(1887)ごろに岐阜産の日傘をまねて作りだしたのが始まりとされます。高松の和傘といえば、輸出用日傘を指すことが多く、和風の図案だけでなく西洋風の意匠も加えた日傘が製造されるなど、海外を強く意識したものでした。

高松が日傘の一大生産地となっていく理由に、作業の簡略化と分業体制があげられます。和傘は通常、竹の骨の間に細長い和紙をはり継ぎますが、高松では、円形の紙^{どうかみ}(胴紙)1枚をはるだけとし、大幅な作業短縮を実現しました。また、日傘は防水の柿渋^{かきしぼ}を塗る作業も不要です。昭和5年(1930)には高松市内に100軒以上の日傘製造業者が確認されており、年間約90万本の生産量を誇りました。傘の骨を作る骨屋をはじめ、和紙を染める染屋^{そめや}(紙屋)、継ぐ部位を作るロクロ屋、仕上げの傘屋などが連携して生産力を高めていたのです。しかし、1950年代には日傘に対する海外需要も止まり、雨傘も洋傘にとって代わられると、高松の和傘職人は減少していきました。

胴紙の検討

和傘職人の中でも今回は、日傘図案加工師の佐々木小六^{ころく}(芳道^{よしみち})を取り上げます。小六は、戦前から昭和48年(1973)ごろまで市内で染屋を営んでおり、胴紙の図案を考え、型紙に繊細な文様を彫り抜く仕事をしていました。当館では、佐々木家に残されていた胴紙製造用具をお預かりし、調査を進めています。

200枚を超える胴紙の調査手順は、①写真撮影(全体表裏と部分拡大) ②資料の計測(法量) ③胴紙の図案や色について検討、といった流れです。高松和傘を研究する香川大学の学生やボランティアが調査に協力してくれています。

調査した胴紙のサイズは子供・日本舞踊向け(径68cm)、大人向け(径80cm)、雨傘(径102cm)に大別され、中でも大人向けが8割以上を占めています。材質・形については、輸出向けの薄くて安価な和紙を使用したもの、円形に切り取る前の方形のものなどが見られました。

胴紙の図案には、蛇の目や渦巻き、藤流れなどの伝統的なものに加え、シンドバッドの冒険のようなおとぎ話を取り入れたもの、蛍光色を使った放射線模様などがあり、その多彩さには驚かされるものがあります。

瀬戸内海歴史民俗資料館

れきみんだより

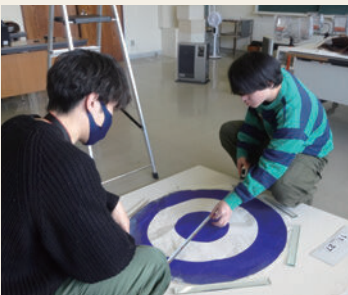


技法としては、シルクスクリーン印刷のような技術を用いて単色で大量に作ったものや、型紙で染めた後に桜や笹の葉の切り絵をはり付けるなど、手の込んだものが確認できました。とりわけ、桜・菊・梅・牡丹・薔薇・月といった文様にアゲハ蝶を組み合わせたものが多く、当時人気の高かったデザインなのではないかと思います。図案の検討と同じくらい私たちを悩ませたのが色彩です。1枚に10色以上使用している場合もあり、パーツごとに色を丁寧に見ていきました。色ごとに型紙を替えて染めていたようなので、職人の苦労がうかがえます。

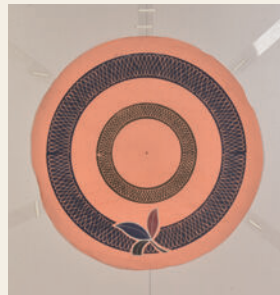
資料調査は団体戦！

胴紙に描かれた動植物や文様の名称、色彩については、学生・ボランティアに教えてもらうことも多々ありました。今回の調査を通して、膨大な資料と向き合うには、和傘職人と同様、複数人で取り組むことが大切だと感じました。調査精度・作業効率・安全性などが高まることはもちろんですが、「粘り強く続けられる」という点で、協力者の存在は大きいです。胴紙の次は、多彩な図案を生み出した型紙。本格的な調査はこれからですが、その一部を瀬戸内ギャラリー企画展にて展示します。

(瀬戸内海歴史民俗資料館 専門職員 岡田 達哉)



学生との資料調査



蛇の目に笹の葉

展
覧
会
情
報

瀬戸内ギャラリー第16回企画展

伝統と創造Ⅱ 職人の道具

3月15日(土)～5月25日(日)

農具や焼印、和傘など香川のくらしを支えてきたさまざまなモノの製作に用いられた道具を集め、職人たちの手仕事の世界を紹介します。